

富永仲基

翁の文

鏡島寛之

校訂並解説

翁の文

此文は、ある翁おきなのかきたるものなりとて、朋友の本もとよりかして見せたる也。かゝる末の世とはいへど、かしこき翁もありたり。三教の道の外に、又誠の道といふことを、主張して説出たり。げに此言ことばのまゝに従ひ行はむに、又何の過ちは、あるまじきものと、仲基ははや此翁に肩ぬぎして思はるゝなり。翁の名はなにかいふと問へど、しれずとて告ざれば、よしなし。古のいはゆる、隱居して言ことを恣にするものゝ、その類たぐひなるべし。吾家わがいえの教ともなし、又人にも傳へむとて、始はじめ終をまりみなかさうつしぬ。

元文三年十一月

伴のなかもと寫す

今の世に、神儒佛の道を三教とて、天竺てんぢく漢から日本、三國ならべるものゝ様におぼへ。或はこれを一致ともなし、或はこれを互に是非して争ふことにもなせり。しかれども道の道といふべき道は各別なるものにて、此三教の道は、皆誠の道に、かなはざる道也としるべし。いかにとなれば、佛は天竺てんぢくの徹みち、儒は漢からの道、國ことなれば、日本の道にあらず。神しんは日本の道なれども、時ことなれば、今の世の道にあらず。國ことなりとて、時ことなりとて、道は道にあるべきなれども、道の道といふ言ことばの本は、行はるより出たる言ことばにて、行はれざる道は、誠の道にあらざれば、此三教の道は、皆今の世の日本に、行れざる道といふべきなり。

右は第一節なり

佛者の物ごと天竺をまなびて、己をも修め、人をも化度すれども、はや梵語をつかひて説法をもなし、人もこれを會得したるためしはあらず。まして調度より家造やつくくりにいたるまで、天竺に一つもたがはぬ様にせんことは、おもひもよらず。天竺は徧袒へくだんして合掌するを禮として、股膝もひひざなども

露見するを端正たんせうなりとせり。されば經にも、踝膝露現陰馬藏くはしつろ げんおんめさうともものせたり。人のかくれのきたる所をも、あらはしてかくさざるをよしとす。佛者は皆かゝることをも、はばかりなすべきなり。右は第二節なり

雖_レ是我語_一。於_レ餘方_一。不_レ清淨_一。不_レ行無過_一。雖_レ非我語_一。於_レ餘方_一清淨者。不_レ得_レ不行と説たれば、全く其國の風俗を變じて天竺を學べと、佛もをしゆるには非ず。然に日本の佛者の、諸事天竺をうつし學ばむとて、此國に不相應なることをのみ行ふものは、皆其道にもあたらずことなり。翁はこれをにくみて、嘲弄をなしたるなり。

又漢からにては、肉食にくじきを主おもとすれば、儒者は牛羊うしひつじなどを畜置かひて、常に料理すべきなり、その献立も、禮らいの内則ないそくにかきたるを、考へてなすべきなり。婚禮には、親迎をなすべきなり。祭には、尸かたしろをおくべきなり。又その衣服にも、深衣を用ひて、頭かしらには章甫などをさるべきなり。今の身には上下かみしもをきて、髪をなでつけにしたるは、漢の形にあらず。尤儒者は、唐音をつかひて、漢文字からもじを用ゆ

べきなり。唐音にもさまざまあれば、周の代の魯國の音をまなぶべきなり。漢文字も品おほければ、古文籀文科斗の文などを用ゆべきなり。

右は第三節也

素夷狄而行夷狄ともいひ、又禮は從俗ともいひ、又禹は袒入裸國ともいへば、全く其國俗を變じて、漢の眞似をせよと、儒者もいふにはあらず。然に、日本の儒者の、諸事漢の風俗に似せむとて、此國にうとき事のみ行ものは、又眞の儒道にも當らぬ事也。

扱また日本のむかしは、人に向ひて手を拍ち四拜するを禮とし、枚手とて柏の葉に飯をもりてくらひ、喪には歌をうたひ泣しのび、喪を除きては、川へ出て祓をなしたり。神を學ぶ人は、か様の事ひとつ、昔にたがはぬやうに考へ行ふべき也。今の世に用ゆる金銀錢などいふ物も、本神代にはなきものなれば、神を學ぶ人は、これをもすて、用ひざるをあたれりとす。又その衣服も、吳服とて吳國より傳へたるなれば、これをも用ひざるをよしとす。又物いふにも、神代

の古語をよく覚えて、父をかぞ母をいろは、爾なんぢををれ、衣服をしらは、蛇へびをはし、疾やまひをあつしれるなど、物事みなことやうにいひて、又その名をも、なに彦何姫の命みことと、皆ことやうに付つくべきなり。

右は第四節なり

左みぎを右ひだりにする事なかれ、右みぎを左ひだりにする事なかれといへば、今の風俗を變じて、太古のやうにせよと、神道もいふにはあらず。然に今の神道の、諸事昔の事を手本として、あやしくことやうなることのみをするものは、又その道にも當らぬ事也。野々宮宰相公の、今の神道は、皆神事にて、誠の神道にはあらずとの給しとぞ。誠に今の世の道は、皆神事儒事佛事の戯れごとのみにて、誠の神道儒道佛道にはあらざるなり。もし此おきななかもとのふみと、又宰相公のことばなかりましかば、仲基なかもともこのこゝろはつくまじきものとおもはる。

かくこれをいへば、嘲あざわらひてきよくりごとする様にも聞ゆれども、その道々を學ばむからは、みな

かくあるべき事なりとする也。これをたとへていはば、五里十里へだてたる遠き國所くにところの風俗さへ、うつし習ふことはかたきものなるに、まして漢天竺からてんぢくのことを日本へまなばむとし、又五年十年すぎたるほどの遠き事さへ、覺えたる人はすくなきものなるに、まして神代のことを今の世にならんとするものは、皆甚だなるまじきことの、大におろかなる事どもなり。たとひそれを能學得よくまなびえて、露ほどもたがはずありとも、人の宜うべしかりとて、又今の世に會得すべきことにもあらず。されば此三教の道は、みな今の世の日本に行はるべき道の道にはあらず。行はれざる道は道にあらざれば、三教はみな誠の道に叶ざる道なりとするべし。

右は第五節なり

しからばその誠の道の、今の世の日本に行はるべき道はいかにとならば、唯物ごとそのあたりまへをつとめ、今日の業わざを本とし。心をすぐにし、身持をただしくし、物いひをしづめ、立ふるまひをつゝしむ。親あるものは、能よくこれにつかふまつり。

翁の自注に云く。六向拜經ろくかうはいきやうを見るべし、專五倫もつほらのこをときたり。又儒者も是を主おもきところとなせり。又神令しんりやうにも、此五種いつくさを載のせられたり。是誠の道は、三教の道にも、闕かくこと能はざるしるしなりとす。

君あるものは、よくこれに心をつくし。子あるものは、能これををしえ。臣あるものは、よくこれをおさめ。夫あるものは能これに従ひ、妻あるものは、能これをひきひ。兄ある者は能これをうやまひ、弟あるものはよく是を憐み。年よりたるものは、よく是をいとをしみ、幼いとけなきものは能これを、慈いっくしみ。先祖のこを忘れず。一家いっけのしたしみをおろかにせず人と交りては、切なる誠をつくし。あしき遊びをなさず、すぐれたるをたつとび、愚なるをあなどらず。凡我身にあてし、あしきことを人になさず。するどにかどくしからずひがみて頑かたくなからず、迫りてせはくしからず。怒どもそのほどをあやまらず喜べどもその守りを失はず、樂むで淫たはるゝにいたらず、悲びて惑へるに至らず。ことたるも、ことたらぬも、皆我仕合よとそれに心をたり。受うくまじきもの

は、塵にてもとらず、あたふべきに臨みては、國天下をも惜まず。衣食のよしあしも、我身のほ
どにしたがひ、奢らず、しはからず。盜まず。僞らず。色このみてほふれず、酒飲さけのみしてみだれず。
人に害なき者を殺さず、身の養をつゝしみ、あしき物くらはず、おほく物くらはず。

翁の自注に云く。瑜珈に、壽未_レ盡死有_二九種因緣_一、一 食過_二度量_一、二 食_二於不_レ宜_一、三 不_レ
消復食など説たり。論語にも割不_レ正不_レ食、不_レ時不_レ食、不_二多食_一など説たり。是皆誠の道
を窺へるもの也。

暇いとまには己が身に益ある藝を學び、かしくならんことをつとめ。

翁の自注に云く。論語に行有_二餘力則_二以學_レ文ともいひ、又律に爲_レ知_二差_一次會_レ等_一學_レ書、
新學比丘開_レ學_二算法_一ともいへり。是も亦誠の道を窺へるもの也。

今の文字をかき、今の言ことばをつかひ、今の食物をくらひ、今の衣服を着、今の調度を用ひ、今の
家にすみ、今のならばしに従ひ、今の掟おきてを守まもり、今の人に交り、もろくのあしきことをなさず、

もろくのよき事を行ふを、誠の道ともいひ、又今の世の日本に行はるべき道ともいふなり。

右は第六節なり

これらのことは、皆儒佛の書に説とふるしたる事どもにて、今更各別にいふべきにあらねども、今翁の新に我いひ出たることのやうに、説なし、人に無用のことを捨て、直ただにその誠の道を指示さしめしたる、その志誠にたふとぶべし。

扱此誠の道といふものは、本天竺もとより來りたるにもあらず、漢より傳へたるにもあらず、又神代よのむかしに始りて、今の世に習ふにもあらず。天よりくだりたるにもあらず、地より出たるにもあらず。只今日の人の上にて、かくすれば、人もこれを悦び、己もこゝろよく、始終はじめをほりさはる所なふ、よくおさまりゆき。又かくせざれば、人もこれをにくみ、己もこゝろよからず、物ごとさはりがちに、とどほりのみおほくなりゆけば、かくせざればかなはざる人のあたりまへより出いで來きたる事にて、これを又人のわざとたばかりてかりにつくり出たることにもあらず。されば今の

世にうまれ出て、人と生るゝものは、たとひ三教を學ぶ人たりとも、此誠の道をすてゝ、一日もたゞん事かたかるべし。

右は第七節なり

されば又此誠の道をすてゝ、別に何の道もつくり出がたきしるしには、釋迦も五戒をととき、十善をととき、貪瞋癡の三みつを三毒と名付、孝きやう養やう父母ふぼ一奉ほう事じ師し長ちやう一を三福の一につらね、諸惡莫作、衆善奉行、自淨じじゆ其意きい是諸佛の教とも説とたり。孔子も孝弟忠恕を説、忠信篤敬をととき、知仁勇の三みつを三徳と名付、懲ちやう怒に塞さい欲よく改かい過くわ遷せん善ぜんとも説き、君子坦蕩々、小人長戚々とも説れたり。又神道の人も、清淨質素正直と説たり。是等は皆誠の道にも叶ひ、いたれることばの、ひがごとにもあらぬ、似たる事共なりといふべし。されば三教を學ぶ人も、かくさへ心得て、ひがくしくあやしく、ことやうなるわざをなさず、人の世にまじらひて、此世をすごしなば、すなはち誠の道を行ふ人なりともいふべし。

右は第八節也

是にて翁も本意をいひあらはせり。全く三教の道をすてんにはあらじ。只その誠の道を行はしめんとなり。

然れどもこゝに翁が説あり。おほよそ古より道をとき法をはじめむるもの、必ずそのかこつけて祖とするところありて、我より先にたてたる者の上を出んとするは、その定りたるならはしにて後の人は皆これをしらずして迷ふことをなせり。

右は第九節也

釋迦の六佛を祖とし燃燈を思ひ出して、生死を離れよとすゝめられしは、それより先の外道どもの、天を祖として、これを因に修すれば昇りて天に生ると説たる、其上を出たるものなり。それより先の外道共も、皆互にその上を出あひたるものにて、鬱陀羅が非非想をときたるは、阿羅羅が無所有の上を出たるものなり。その無所有處の説は、又それより先の識處の上を出たる

もの也。其識處の説は、又それより先の、空處或は自在天等をときたる、其上を出たるもの也。か様に段々とき出して、天をば三十二までに説のぼしたり。是はみな外道の事にて、同じ釋迦の佛法にも、文殊の徒ともがらが般若の大乘をつくりて、空をときたる、その上出たるものなり。普賢の徒の法華深蜜などを作り、不空實相をときて、それを成道じやうどう四十餘年の後の説法にかごつけたるは、又文殊の説の空の上を出たるものなり。其次に華嚴をつくりたるもの、成道二七日の經法にかごつけて、日輪者先づ諸大山王を照すにたとへたるは、又これを成道の始にかごつけて、諸法の上を出たるものなり。其次に涅槃をつくりたるもの、涅槃一晝夜の説法にかごつけて、醍醐の牛乳より出るにたとへたるは、諸法を合せて其上を出たるものなり。又金剛薩埵さつたの大日如來にかごつけて、法華を第八、華嚴を第九とたて、釋迦の説法を皆顯教と名付たるは、是は諸法をはなれて又其上の上を出たるもの也。又頓部の經の、一切煩惱、本來自離、一念不生、即是成佛などいひ、又禪宗に四十餘年所説の經卷は、みな不淨を拭ぬぐふ破れ紙などいひ出たるは、これを諸

法を破りて、又其上の上を出たるものなり。是をしらずして、菩提留志はたいるしは、釋迦の一音、色いろにきこゑたるなりといひ、天又台は、釋迦の方便にて、一代の中に、説法が五度かはりたるといひ、又賢首けんじゆは、衆生の根機にしたがひて、其傳る所おのゝことなりと心得られたるは、共に大なるとりそこなひのひがみたる事どもなり。此始末をしらむとおもはゞ、出定しゆつじやうといふ文ふみを見るべし。

右は第十節なり

又孔子の、堯舜を祖述し、文武を憲章して、王道を説出されたるは、是は其時分に、齊桓晋文のことをいひて、専ら五伯の道を崇びたる其上を出たるものなり。又墨子の同じく堯舜を崇びて、夏の道を主張せられたるは、是は又孔子の文武を憲章せられたる、その上を出たるものなり。扱又楊朱か帝道をいひて黄帝などを崇びたるは、又孔墨の説れたる王道の上を出たるものなり。許きよ行が神農を説とき、莊列の輩の無懷葛天鴻荒の世を説きたるは、又皆その上の上を出たるものなり。

是等は皆異端のことにて、同じ孔子の道にも、儒分れて八となるとあれば、さまざまに孔子にかこつけて、皆その上を出あひたるものなり。告子が性無_レ善無_ニ不_一善と説たるは、世子が性有_レ善有_レ惡と説たる、その上の上を説たるものなり。又孟子が性善を説たるは、告子が性無_レ善無_ニ不_一善と説たるその上を出たるもの也。又荀子が性惡を説たるは、又孟子が性善を説たるその上をいでたるものなり。樂正子^{がくせいし}が孝經を作りて、曾子の問答にかこつけて、孝を主張して説たるは、又もろくの道をすて、孝へちとしてめたるものなり。是をしらずして宋儒は、皆これを一なりと心得、近頃の仁齊は、孟子のみ孔子の血脈を得たものにて、餘他の説は、皆邪説也といひ、又徂徠は、孔子の道はすぐに先王の道にて子思孟子などはこれに戻れりなどいひしは、皆大なる見ぞこなひの間違たる事どもなり。此始末をしらんと思はば、説蔽^{せつぺい}といふ文^{ふみ}をみるべし。

右は第十一節なり

翁はかく説たれども、孔子の文武を憲章して王道を説れたるは、五伯も道の功利をのみ崇び

て、事皆僞りに馳るを患へて也。わざと巧みてその上を出んには非ざるべし。又釋迦の六佛を祖として、生死を離れよと説れたるも、それより先の外道共の皆眞實の道に非ざるを患へて也。わざと巧みて上を出たるには非ざるべし。もしも又翁の言のごとく、わざと巧みてその上を出たるものならば、釋迦孔子とても皆とるにはたらざるものといふべし。

扱又神道とても、みな、中古の人共が神代の昔にかこつけて、日本の道と名付、儒佛の上を出たるものなり。譬へていはば、天竺の光音天、漢の盤古氏の時分にも、佛といひ儒といふ、一廉の定りたる道のあるにはあらず。佛といひ儒といふも、皆後の世の人が、わざとかりに作り出たることどもなれば、神道とても又神代のむかしにあるべきには非ざる也。其最初に説出たるを兩部習合といふ。儒佛の道を合せて、能程に加減して作りたるものなり。其次に出たるを本迹縁起といふ。これは其時分に、神道の起りたるをねたみて、佛者の徒が陽には神道を説て、陰にはこれを佛道へ落しこめたるものなり。扱其次に出たるを、唯一宗源といふ。これは儒佛の道を離れ

て、唯純一の神道を説たるもの也。此三部の神道は、みな中古の事共にて、又近頃に出たるを、王道神道といふ。是は神道の道とて、各別に其道のあるにはあらず。王道が乃すなはち神道なりと説たるなり。又或は、陽には神道を説て、陰には儒と一つなる神道も出たり。是等はみな、神代の昔にはなき事なれども、かやうに説かこつけて、互に其上を出あひたる世のなり。是をしらずして、愚なる世の人の、皆誠の道と心得、其身にもひがごとをし、たがひに是非して争ふことにもするは、氣毒にも、笑止にも、またはおかしうも、翁が心にはおもふなり。

右は第十二節なり

扱又三教にみなあしきくせあり。是をよく辨へて迷ふべからず。

右は第十三節なり

佛道のくせは、幻術なり。幻術は今の飯繩いづなの事なり。天然はこれを好む國にて、道を説人ときを教ゆるにも、これをまじえて道びかされば、人も信じてしたがはず。されば釋迦はいづなの上手に

て、六年山に入て、修行せられたるも、そのいづなを學ばむとてなり。又諸經にいへる、神變神通神力などいふも、皆いづなの事にて、白毫光の中に三千世界をあらはし、廣長舌を出して梵天まであげられたるなど、又維摩詰が八萬四千の獅子座を方丈の内に設け、神女が舍利弗しゃりほつを女になしたるなど、皆そのいづなをつかひたるものなり。さてそれよりいろくいろくのあやしき、生死流轉しやうじるとん因果をとき、本事本生未曾有をとき、奇妙なる種々の説をせられたるも、皆人に信ぜられんがための方便なり。是は天竺の人をみちびく仕方にて、日本にはさのみいらざる事也。

右は第十四節なり

翁はかく説たれども、神通と飯繩とは相違ある事也。飯繩は術より出で、神通は修行より出る事なり。されども翁の言むべなりとす。

又儒道のくせは、文辭なり。文辭とは、今の辯舌なり。漢はこれを好む國にて、道を説人を導にも、是を上手にせざれば、信じて従ふ事なし。たとへていはば、禮の字を説にも、本は冠昏喪

祭の禮式をこそ、禮とはいふべきに、それを爲_二人子_一之禮、爲_二人臣_一之禮と、人の道にもいひ、又視聽言動の上にもいひ、又禮は天地の別なりなど、天地にまでかけていふにてしるべし。又樂の字なども、只鐘鼓かねつづみを鳴し慰むことなるに、それを樂といひ、樂といふ、鐘鼓しやうこをしもいはむやなどといひ、又樂は天地の和やはなりなどいふにてもしるべし。又聖の字なども、本は只智慧のある人をいふことはなるにそれをいひひろめて、人間の最上神變もあるものゝ様にいひなせり。孔子の仁をはり、曾子の仁義をはり、子思の誠をはり、孟子の四端性善を説、荀子の性惡をとき、孝經の孝をとき、大學の好惡を説、易の乾坤をときたるなど、皆なにともなき心安きこと共を、辯舌仰山にときなし、人におもしろくおもはれて、したがはれんとするの方便なり。漢の文辭は、すぐに天竺の飯繩にて、これもさのみ日本にはいらざる事なり。

右は第十五節なり

翁はかく心安きこと共と説たれ共、道の至れる事あるは、翁も知ざらんや。又秘授のたやす

く傳へがたきことあるも、翁はしらざらむや。翁の此のことばに迷まどひて本意を失ふべからず
 扱又神道のくせは、神秘傳傳授にて、只物をかくすがそのくせなり。凡おおよそかくすといふ事は偽いつはり
 盜のその本にて、幻術や文辭は、見みても面白おもしろくても聞きごとにて、ゆるさるゝところもあれど、ひ
 とり是くせのみ、甚だ劣れりといふべし。それも昔の世は、人の心すなほにて、これをおしえ導
 くに、其便そのたよりのありたるならめど、今の世は末の世にて、偽盜いつはりぬすみするものも多おほきに、神道を教おしゆるもの
 へ、かへりて其惡を調護することは、甚だ戻れりといふべし。彼あさましき猿樂茶ゆやうの湯様の事に
 至るまで、みな是を見習ひ、傳授印可を拵あまつさへへ、剩あたい價を定めて、利養のためにする様になりぬ。
 誠に悲むべし。然にその是を拵へたる故を問とに、根機の熟せざるものには、たやすく傳へがたき
 がためなりとこたふ。是も聞ゆるやうなれども、其かくしてたやすく傳へがたく、又價を定めて
 傳授するやうなる道は、皆誠の道にはあらぬ事と心得べし。

右は第十六節なり

翁の文終

延享三年春二月

大阪高麗橋壹町目

富士屋長兵衛行